

「重さ」の担う建築の存在性について

1960 年～1970 年代の建築思潮と建築にみる重厚感の分析をもとに

For the presence of the architecture in which the "heaviness"

Based on the analysis of profound feeling to see the architecture and the 1960s and 1970s architecture

○永田 琴乃¹ 田所 辰之助²○Nagata Kotono¹ Tadokoro Shinnosuke²

This research is a study of heaviness with the architecture. Opportunity is a sense of discomfort for the construction trend of today, questioning the importance of architecture in modern has a weight. I intended to show the weight of the building in modern. These studies as a new space concept. The listed building Thought of 1960 and 1970s as the target, to perform the analysis of ideas and architectural works of the architect.

1. はじめに

今日、軽くてその存在感をも消し去ろうとする建築。1990 年代後半に流行をみせたライトコンストラクションやエフェメラルな表現は、現在でも特に国内において継続していると考えられる。そしてそれらの建築に軽さを感じることに同じように、建築に対して「重さ」を感じる瞬間も確かに存在する。これまで建築は意匠的な理想以外にも、構造強度の向上や技術の発達に伴って軽さの追求がされてきた。しかし、その中で排除されてきた建築の「重さ」に対して私は建築のもつ唯一性のようなものを感じている。本研究では、建築のもつ「重さ」に視点を当て、それらが担う存在性についての考究を行う。



Fig1. ライトコンストラクション

2. 研究目的

重厚感や存在感を消すことが追求された建築作品がメディアを賑わせ、いつしか私たちの身の回りにはあふれるようになった。本研究では、そのような現在において、建築が持つ「重さ」の重要性を改めて問い新たな空間概念として示すことを目的とする。

3. 研究方法

1960 年代から 1970 年代に流行したコンテクスチュアリズム、ラショナルリズム、それぞれの思潮を軸に建築の「重さ」について考究する。またそれぞれの思潮の中にいた建築家たちの具体的な思想や批評の調査、建築作品の分析により、「重さ」の担う建築の存在性の考究を行う。

4. 2つの建築思潮の概要

4-1. コンテクスチュアリズムについて

コンテクスチュアリズムとはモダニズム（近代主義）流行の後にみせた建築思潮である。コーリン・ロウが率いるコーネル派では、当時行われていた多くのスクラップ・アンド・ビルドとは対比的に、新たな建築挿入時において理想型（ユートピア）をコンテクストに応じて都市や建築形態を変形せるという考え方がその始まりであった。

4-2. ラショナルリズムについて

ラショナルリズムもまたモダニズムの流行の後に広がった建築思潮の一つであり、中心的人物としてアルド・ロッシが挙げられる。1970 年代にヨーロッパで広がり、都市空間や建築造形に単純明快で合理的な理論を導入することを目指した。類推的であることを追求し、また都市空間を秩序づける手段としての形態の意義を重視したことなどがこの思潮の特徴として挙げられる。

5. コーリン・ロウの「透明性」についての考察

コーリン・ロウが画家のロバート・スラッキーと共に執筆した「透明性一字義どおりの、そして現象的な」「透明性一字義どおりの、そして現象的な：第二部」の中で、彼らはここでモダニズム建築において賞賛された「透明性」について二つの概念に区分した。1つは曖昧性の感覚を生じさせない「字義どおりの透明性」であり、もう1つはキュビズム作品の特徴でもある、多義的で奥行きを生じさせる「現象的な透明性」である。そして異なる透明性の中でコーリン・ロウは「現象的な透明性」を高く評価した。

今日では浸透していないこれらの透明性に対する概念は、現代における物質性と非物質性にも適用することができるのではないか。これらを用いることで、字義通りの透明性ではなく建築の存在感を持って透明性を定義することが可能になる。そしてこれらの概念が1960年～1970年代の建築にみられる「重さ」に影響していることが考えられる。

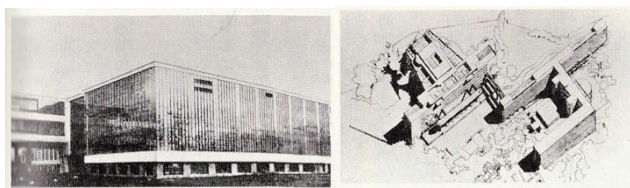


Fig2. 字義どおりの透明性 Fig3. 現象的な透明性

6. アルド・ロッシと建築の造形

ラショナルリズムの中心的人物であったアルド・ロッシは「都市の建築」の中で形態の存在感、建築の存在感が機能構成よりも重要な問題であると述べている。その他にも彼は「建築の歴史は建築のための素材をなす」という考えを持ち、コンテクスチュアリズムにも共通する折衷主義的な考えと共に類推的都市の追求を行った。ここではラショナルリズムの一例として彼の作品を対象とする。

合理的主義とも訳されるラショナルリズムであるが、建築作品をみると形態操作の特徴として幾何学的形態の追求も考えることが出来る。

幾何学的形態の追求はこの時期になって突如現れた概念ではなく、むしろヨーロッパにそれまで根付いてきた形態操作であると考えられる。しかしながら、この形態操作こそがラショナルリズム建

築に独特な存在感と重厚感を感じさせる要素であると考えられる。

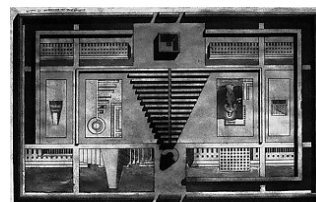


Fig4. クオネの対ドイ Fig5. モデナ共同墓地
ツ抵抗運動碑

7. まとめと展望

1960年～1970年代における建築思潮、特にコンテクスチュアリズムやラショナルリズムに「重さ」を感じることは、今日とは異なる透明性に対する概念の違いや、建築の造形に見られる特有の傾向からであったと考えられる。それらの始まりはモダニズムに対する批判的な意図があったが、モダニズムに代わる新たな建築デザインの探求でもあったと言えよう。

今後の展望は、これらの造形概念を軸に現代における建築の「重さ」とそれらが担う建築の存在性について考究を深めることである。

8. 参考文献

- [1] 秋元馨「現代建築のコンテクスチュアリズム入門 環境の中の建築 / 環境をつくる建築」彰国社, 2002
- [2] 八束はじめ「表象の海に建築を浮かべよ」, SD7710, 10号, 1977
- [3] ラファエル・モネオ「アルド・ロッシ: 建築思想とモデナ共同墓地」, SD7803, 03号, 1978
- [4] アルド・ロッシ「都市の建築」大龍堂書店, 1991
- [5] 中村敏男「アルドロッシ」 a+u, 1982

Fig1. (出展 :
<http://ecx.images-amazon.com/images/I/>)

Fig5. (出展 :
<http://db.10plus1.jp/imagemanager/show/id/3030/size/320/>、
<http://db.10plus1.jp/backnumber/article/>)